

「循環」再ハッケン!

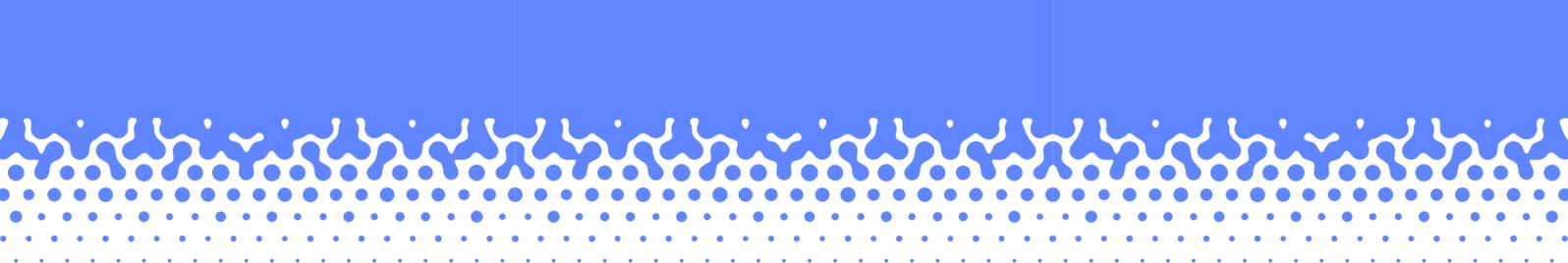
月刊日本館

Issue

11

特集 | Feature

やわらかく
作る



Passing Down Through Generations. It's About Creating with Flexibility.

直す工夫が美しさを生み、世代を超えて継承される。
ただ丈夫さを求めるだけじゃない。やわらかく作るということ。
知恵と技術が歴史を織り成し、そして未来へ続いていく。

issue 11

Built it Soft

特集記事



伊勢神宮に受け継がれてきた、 古くて新しいサステナビリティの精神

伊勢神宮に1300年以上の間受け継がれてきた「式年遷宮」から、循環型社会を築いていくためのヒントを探ります。

P.04



時代と国境を超えた日本の針仕事。 「刺し子」が紡ぐ循環の価値観

日本の伝統技法である「刺し子」が国内外で注目を浴びています。その魅力、受け継がれるサステナブルの精神について紐ときます。

P.12



伊勢神宮に受け継がれてきた、 古くて新しいサステナビリティの精神



Index

- ・ およそ8年がかりで執り行われる、伊勢神宮最大の神事 5
- ・ あえてこわれやすい材料を使って、「常若」の精神を体現する 7
- ・ 伊勢神宮の長い歴史は、水の循環とともにある 9

古くから「お伊勢さん」の愛称で親しまれる「伊勢神宮」(三重県伊勢市)。全国的にも広く知られているこの神社には、1300年以上もの間、脈々と受け継がれてきた神事があります。それが「式年遷宮」です。20年に一度社殿を新しく造り替える儀式で、2033年には第63回目を迎えます。古い形態を保ちながら新しくあり続ける営みには日本の精神文化にも通じる「常若^{とこわか}」という考え方が込められており、現代のサステナビリティとも深く共鳴します。先人たちは式年遷宮にどんな意義を見出し、なぜ何世代にもわたってこの伝統を守り続けてきたのでしょうか。その本質をたどると、日本発の循環型社会を築いていくためのヒントが見えてくるかもしれません。



およそ8年がかりで執り行われる、伊勢神宮最大の神事

伊勢神宮で脈々と受け継がれてきた「式年遷宮」。「遷宮」とは「宮地を改め、新しい社殿を造営して神さまを古い正殿から新しい正殿に遷す」こと。「式年」は「定められた年」を意味しています。約1300年の歴史があるこの神事ですが、執り行われるようになった理由は、今もって謎のまま。伊勢神宮に関する著書をいくつも執筆する文筆家・千種清美^{ちくさきよみ}さんは「時代背景からその理由を読み解くこともできる」と話します。

千種さん 式年遷宮は天武天皇のご発意によって制度化されました。当時は中国大陸の文化が次々と流入していた時期で、国が大きく揺れていたんです。激動の時代の中で、国を統率するために何ができるのか——。その答えとして導き出されたのが、式年遷宮という国家プロジェクトだったのではないのでしょうか。



左が新しく造り替えられた正殿、右が20年経過した正殿

式年遷宮はいわば“神さまのお引越し”……。そう聞くと簡単に感じられますが、準備はとても大がかり。正殿が新たに造営されるほか、別宮や鳥居といった170の建物がそっくりそのまま造り替えられます。準備期間だけで8年もの歳月が費やされ、その間、30以上の神事や行事が行われます。



御^み杣^{そま}山^{やま}（新しい神殿を建設するための御用材を切り出す神聖な山）の入口に宿る神に祈ることから「山口祭」という。

数ある神事の中で、千種さんが「とくに印象に残っている」と話すのは、御用材（神殿を建設するための建材）を切る「御杣始祭」です。このとき伐採されたひのきは、御神体を納める器に使われます。

千種さん 伐採された切り株に梢^{こずえ}の小枝が挿してあったんです。気になって、杣頭^{そまがしら}に尋ねると「山から木を一本いただいたので、山の神への感謝のしるしです」とのこと。日本人の自然への信仰が、今もこうして現代にも受け継がれていることを知り、胸が熱くなったことを覚えています。



左：「御杣始祭」では、2本のひのきが古くから伝わる作法によって切り倒される。／右：千種さんが立ち会った、切り株に梢を挿して立てる「鳥^と総^ら立て」という習わし。



あえてこわれやすい材料を使って、「常若」の精神を体現する

ギリシャのパルテノン神殿やエジプトのピラミッドなどの遺跡と比べて、伊勢神宮の社殿はその対極にあるかのように、実に簡素なたたずまいです。正殿に用いられている木材はひのきとかやが中心で、建築様式は高床式穀倉から発展した「唯一神明造^{ゆいいつしんめいづくり}」。木造部分は自然の状態に近い素木^{しらぎ}を使い、屋根はかやぶきで本を開いて伏せたような形状をしています。加えて、土台となる礎石を据えず、支柱は直接地面に埋め込む掘立式。パルテノン神殿やピラミッドと比べると、どこか心もとない印象すら感じる向きもあるかもしれません。



柱を埋めて建てられているのがわかる。

耐久性の低い材料を使い、造り替えては解体し、造り替えては解体し……。一見すると手間ばかりかかり、非効率だと思われるかもしれません。しかし、この営みには神道に伝わる、「常若」と表現される特別な精神が息づいており、重大な意義を持っています。

千種さん 「常若」とは、常に若々しくあることを意味します。これは年齢的な若さではなく、いつまでもみずみずしい精神の在り方を指しているのだと思います。新しい正殿に神さまをお祀りして、大いなる力を蓄えていただく。そんな思いが根底にあるのではないのでしょうか。また、神社の一日が掃除からはじまるように、神道ではけがれの無い清浄な空間を尊ぶことも関係しているのかもしれません。

式年遷宮は、戦国時代の混乱の中で途絶えかけたことがありました。およそ130年間中断されたのち、安土桃山時代に再興。その後、太平洋戦争の影響で4年間の延期を経たものの、現代まで滞ることなく執り行われています。

千種さん 100年以上も中断しながら、よく再興できたものだと感服します。ただ、中断していた時期も修復や修繕などをしながら仮殿遷宮を行い、しのいできたようです。

中断していた時期があったとしても、1300年間も絶えることなくこの儀式が現代に至るまで続けられているのは、比肩するものがない、人類の文明史の中でも特筆すべきことです。なぜ、先人たちはこれほどまでに「造り替える」ことを重視していたのでしょうか。

千種さん 言葉で説明するのは難しいのですが……。私の場合は「宇治橋」の「宇治橋渡始式」^{うじばしわたりはじめしき}で、式年遷宮の本質に触れた気がします。宇治橋は内宮^{ないくう}へと通じる橋で、式年遷宮にともない架け替えられます。その架け替えられたばかりの宇治橋を渡ったとき、ふわっと木の香りに包まれて、心が清められたような感覚を覚えました。辺りは澄んだ空気が満ちており、自然と笑顔がこぼれるほどの清々しさ。新しいものに触れたときに湧き上がる、このポジティブな気持ちを昔の人たちも感じとっていたのではないのでしょうか。



前回の式年遷宮にて、2009年当時架け替えられたばかりの宇治橋。

伊勢神宮の建築物は20年後の生まれ変わりが約束された状態で建てられます。この永続性こそ常若の象徴であり、私たちに過去・現在・未来が一続きであることを教えてくれます。

なんだか儼かな雰囲気がありますが、私たちの暮らしに目を向けると、意外と身近に感じられるはず。例えば、桜は咲いては散り、また翌年も変わらず美しく花を咲かせます。田んぼの稲も一度刈り取られたあと、新しい苗が植えられ、次の実りへとつながっていきます。こうして古いものが新しいものへと受け継がれていく営みが「常若」の精神そのものなのです。

伊勢神宮の長い歴史は、水の循環とともにある

式年遷宮の造り替えには、およそ1万3000本分のひのきが御用材として使われます。いずれも神宮技師が厳選した一級品で、大小さまざまな部材に製材。その数はなんと10万点に及ぶともいられています。

千種さん 造営には木と木をパズルのように組み合わせる伝統工法「木組み」が用いられるので、くぎはほとんど使いません。くぎを使わないことで解体がしやすくなり、正殿の本格的な建築の前には仮組みも行われています。これはリサイクルしやすい工法といえるのではないのでしょうか。



社殿に使われるひのきはおよそ1万3000本。そこから製材された約10万個もの部材を手作業で組み、社殿を建てていく。

古い建物を解体して出た古材は、できる限り再利用されます。例えば、外宮と内宮の正殿の太い柱は宇治橋の鳥居に。さらに20年後には、それぞれの鳥居が「七里の渡し」(三重県桑名市)と「関の追分」(三重県亀山市)の鳥居として再利用されます。

千種さん 伊勢神宮は、1000年以上も前からリサイクルやサステナブルを実践していたわけです。古材を譲り受けた神社を巡るのも楽しみの一つ。仕事柄、神社を取材することも多いのですが、訪れるたびに伊勢神宮とのつながりを調べてしまいます。

さらに千種さんは「伊勢神宮の歴史は『循環』とともにある」と語ります。その象徴とも言えるのが、社殿の後方に広がる「宮域林」です。東京の足立区がすっぽり収まるほどの広大な森林で、伊勢市の4分の1を占めています。立ち入り禁止のエリアも多く、その中には神域も少なくありません。手つかずの自然が残っており、多様な生態系が築かれています。

この宮域林に雨が降ると、雨水が土壤に染み渡り、やがて一級河川の五十鈴川へ。川の流れは多くのミネラルとともに伊勢湾へと注ぎます。そして、海から上がった水蒸気が雨雲となって、再び宮域林を潤すことに。この水源を生かして、伊勢神宮ではお米や野菜などを栽培しています。



あまてらすおみ かみ
天照大御神にお供えするお米を2000年前から育てている神宮神田。五十鈴川の水を用いて稲作が行われている。

千種さん 神さまに捧げるお米や野菜などの供物は、基本的に自給自足なんです。また、伊勢湾でとれた海の幸も御神前に供えられます。だから、神事を継続するためには、森と水を守ることが不可欠なんです。

伊勢神宮は、御用材のひのきを自給自足するために宮域林の保全・整備を進めています。もともと宮域林では御用材が切り出されていましたが、資源が枯渇したため、江戸時代以降は木曾（岐阜県・長野県）の山々に場所を移しました。

宮域林を管理するための「神宮森林経営計画」が立ち上がったのは、1923年のこと。ひのきを一から育成する取り組みですが、社殿の柱になるように立派に成長するまでには200年もの歳月が必要です。現在は計画の折り返し地点にあり、間伐や植樹などが定期的に行われています。

ゴールまであと100年——、もはやひと世代、ふた世代では足りないくらい気の遠くなるような話です。今、苗木を植えている人たちがゴールを見届けることはありません。加えて、良材に育つ苗木は全体のごく一部に過ぎません。

100年前の人たちが未来に託して苗を植えたように、現在の取り組みもまた、100年後の森を支えることとなります。この地道な取り組みが実を結びはじめており、前回の式年遷宮では宮域林のひのきが御用材の一部に使われました。



神宮の域内を流れる五十鈴川。

「変わらないために変わり続ける」という独自の価値観を貫く式年遷宮と、自然界の絶え間ない循環。どちらも清らかさを生み出す壮大な仕組みであり、深く共鳴し合っています。その背景に目を向けると、千種さんの「自然そのものが伊勢神宮の源になっている」という言葉の重みがより深く心に響いてきます。式年遷宮が1300年以上にわたって受け継がれてきたのは、先人たちがこの営みの中に自然との調和を感じ、普遍的な安心感を抱いていたからなのかもしれません。

先人から引き継いできた「常若」の精神。循環型社会への転換が世界的に求められる現代において、日本発の独自の哲学と実践として新たな意義を生み出し、輝きをまとっていくことになります。



ちくさきよみ
千種清美

三重県津市生まれ。NHK津放送局630ニュースアシスタント、三重の地域誌『伊勢志摩』編集長を経て文筆業に。伊勢神宮、祭り、歳時記といった日本文化についての講演や執筆活動を行う。新幹線車内誌『月刊ひととき』に「伊勢、永遠の聖地」を8年間にわたり連載。著書に『常若の聖地、伊勢神宮』（ウエッジ）、『永遠の聖地、伊勢神宮』（ウエッジ）、『三重 祭りの食紀行』（風媒社）、『女神の聖地、伊勢神宮』（小学館新書、全国学校選定図書）、『伊勢神宮式年遷宮参拝ガイド』（ワニブックス）などがある。



時代と国境を超えた日本の針仕事。 「刺し子」が紡ぐ循環の価値観



Index

- ・ 古いものこそ美しい。
イギリスの作り手と共鳴した、日本のものづくりの精神..... 13
- ・ ポロに宿る日本文化の「美」..... 15
- ・ 農村の女性たちによって紡がれた「津軽こぎん刺し」..... 16
- ・ 「心変わりしたのかな...?」
細部から作り手の人間味が感じられるものも..... 17

日本の伝統的な布の補強・修繕技法である刺し子。約200年以上前、江戸時代の東北地方で生活の知恵として生まれた刺し子は現在、サステナビリティの観点、そしてその美しさから、国内外で注目を浴びています。なぜ、刺し子は時代を超えて人々を魅了するのでしょうか？

イギリスを拠点に刺し子を用いたリペアサービスを展開する「Studio Masachuka」の森川真彦さん、伝統工芸品「津軽こぎん刺し」の収集・展示を通じて、その文化的背景を伝える「サントリー美術館」の久保佐知恵さん、お二人それぞれの観点から刺し子の魅力について伺いました。

サステナビリティの重要性が語られるはるか昔に、名もなき作り手たちが生み出した美しい刺しゅう。そこに縫い込まれた思いに触れてみましょう。

トップビジュアル:「東こぎん 着物 一領 江戸～明治時代 19世紀」/ サントリー美術館提供



古いものこそ美しい。イギリスの作り手と共鳴した、日本のものづくりの精神

刺し子とは、農村部を中心に発達した日本の伝統的な布の補強・修繕技法のこと。200年以上前に生まれたこの技術は、着古した作業着や生活用品を繕うために日本の各地で用いられてきました。

実用面での必要性から生まれた刺し子ですが、現代では衣服の補強に加え、装飾技法としても評価され、ファッションやインテリアにも取り入れられています。

森川真彦さんは2012年にイギリスで「Studio Masachuka」をオープンし、自身のブランドを運営すると同時に、刺し子を用いた洋服のリペアサービスを展開しています。2022年には「UNIQLO EU」から洋服のリペアサービスを開始したいと依頼を受け、「RE.UNIQLO STUDIO」として店舗の一角でコラボレーションを開始。同サービスは現在、イギリス、ドイツ、デンマーク、イタリア、スペインの5か国で展開するほどの人気を集めています。ヨーロッパでの刺し子の流行を、森川さんはどのように見ているのでしょうか。

——森川さんは、刺し子が海外で注目を集めている理由をどう考えていますか？

森川さん 刺し子のデザインがファッションとして受け入れられていることはもちろん、サステナビリティの観点から注目を集めているのではないのでしょうか。

特に盛り上がりを見せているのがイギリスです。イギリスにはサヴィル・ロウという伝統的なテーラーが集まるエリアもありますし、縫製の技術への感度が非常に高いんです。ヨーロッパでは見られない日本の伝統的なリペア手法が、デザイン、技術、精神性という観点から新鮮に映るのだと思います。



Studio Masachukaが刺し子でリペアを行った古着

——ファッション業界や洋服の作り手など、一部の人の間だけで広がりを見せているということでしょうか？

森川さん いえ、決してそういうわけではありません。店舗で行うワークショップには多様な方々が参加しており、幅広く受け入れられていると感じます。
イギリスでは『ソーイング・ビー』という裁縫をテーマにしたリアリティショー番組が人気なのですが、以前、この番組で刺し子が取り上げられたことがありました。それを契機に多くの人に知られることになったんです。最近では、日本の方々でも知らないようなマニアックな伝統技術を知っている人も増えています。

——日本の伝統的な技術がヨーロッパで受け入れられているというのは面白い動きですね。

森川さん そうですね。古いものを大切にするという価値観がヨーロッパに根付いていることも、大きな要因だと思います。

日本では新しいものほど価値があり、使用すればするほどその価値が損なわれてしまう感覚があると思います。家が中古になった瞬間に価格が下落するのはその価値観を表す代表的なものではないでしょうか。

一方でヨーロッパではアンティークのように、古いものにこそ高い価値を見出す思想が根付いています。住宅にしても100年以上にわたって修復しながら住み続けていくことが当たり前ですし、古いものに価値を見出すという文化があるんです。

それは洋服においても同様です。すぐに新品に買い換えるのではなく、一着のジャケットを修復しながら着続ける。あるいは、古着に価値を見出し、古い衣服を受け継いでいくということが当たり前に行われています。

RE.UNIQLO STUDIOでは、刺し子の他にも洋服をインディゴの型染めや絞り染めなどでリメイクし、再販するという取り組みも行っています。資源が枯渇し、サステナビリティが問われる時代において、古いものの価値を見直し、そこに付加価値を加えていくビジネスモデルはより重要視されていくと思います。



ロンドンにあるUNIQLOのリージェントストリート店にできたRE.UNIQLO STUDIO。このスペースもまた、1920年代に理髪店として使われていたスペースが生まれ変わったもの。



ボロに宿る日本文化の「美」

——サステナビリティや技術的な関心だけでなく、デザイン性が評価されているというお話がありました。具体的にはどのような点に魅力を感じているのでしょうか。

森川さん 色あせてボロボロになった古い布に白い糸を刺す。刺し子によって生み出される美しさは、ヨーロッパ的な美意識の「きらびやかな美しさ」とは異なるものです。日本における「わび」「さび」という言葉が表すように、刺し子には経年劣化により生まれる魅力があり、彼らもそこに「深みのある美しさ」を感じとっているのではないのでしょうか。ただし、刺し子は生活における必要性から生まれたもの。表面的な美しさだけでなく、そうした日本の文化とともに伝えていきたいと考えています。

——意匠だけでなく文化的な背景をセットで伝えていくために、森川さんは今後どのような活動を？

森川さん 2025年の5月にロンドンで「London Craft Week」というイベントが開催されるのですが、私はそこで伝統的な刺し子の一種である津軽こぎん刺しの作品展示や、現代の作家さんを招いたワークショップを企画しています。津軽こぎん刺しは長い冬、雪の中に閉じ込められる時間の中で生まれたものであり、地域や家系ごとに伝わる独自の紋様が存在しています。それはスコットランドのタータンチェック（スコットランドの伝統的な格子柄で、家紋のように民族のアイデンティティーや一族を象徴する意味合いがある）に通じます。文化的・歴史的背景を踏まえて、その技術や魅力を説明する。そうすることで、刺し子はもっと多くの人々に伝わっていく可能性があると考えています。



農村の女性たちによって紡がれた「津軽こぎん刺し」

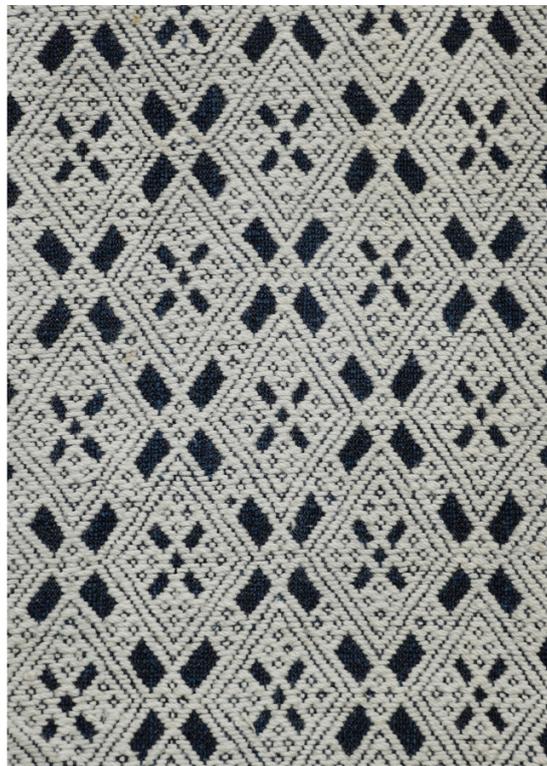
森川さんが語る通り、刺し子は日本の生活環境に深く根ざした技法であり、その歴史的・文化的背景とは切り離すことができないもの。中でも、青森県の伝統工芸品に指定されている津軽の「こぎん刺し」は、厳しい寒さと衣服規制という生活環境から生まれた知と美の結晶です。

ここからは、明治期を中心とする30点の津軽こぎん刺しを収蔵する「サントリー美術館」の学芸員である久保佐知恵さんに、その歴史と魅力について伺います。

——「津軽こぎん刺し」とはどういったものなのでしょう？

久保さん 津軽こぎん刺しは、青森県津軽地方において江戸時代後期以降、農村の女性たちの手によって作られ、育まれてきた技法です。濃紺や藍色、花田色(薄青色)に染めた麻布に、白い木綿糸で模様を刺していきます。特徴的なのは、麻布の緯糸(織物の縦糸のこと)を奇数目に拾って、緯糸(横糸のこと)に沿って木綿糸を刺していくという点。世界でもまれに見る緻密な技法で、初めて見る方の中には、織機で編んだ織物と見間違える人もいます。

津軽こぎん刺しは明治20～25年頃をピークに一度はすたれましたが、1930年代に民芸運動が盛り上がるとともに再評価され、現在は青森県の伝統工芸品として指定されています。



「東こぎん 着物(部分) 一領 江戸～明治時代 19世紀」津軽こぎん刺し特有の幾何学模様は、「モドコ」と呼ばれる基礎的な単位模様を組み合わせ構成されています。1mmにも満たない麻布の経糸を奇数目に拾いながら、緯糸に沿って木綿糸を刺しつづる作業を一段ずつ繰り返すことで、織物のように美しい幾何学模様が生み出されるのです。

久保さん 津軽こぎん刺しは、作られている地域や模様構成によって「西こぎん」「東こぎん」「三縞こぎん」の三種類に分けられます。基礎模様は今40種類ほどあり、それらを組み合わせてさまざまな模様を作ります。例えば「テコナ」というちょうちょうの模様や、魔よけやマムシよけの意味を持つ「馬の轡くつわ」などが代表的なものです。



左から順に「東こぎん 着物 一領 江戸～明治時代 19世紀」「西こぎん 着物 一領 江戸～明治時代 19世紀」「三縞こぎん 身頃 一枚 江戸～明治時代 19世紀」西こぎんは背中に「馬の轡」の模様が刺されており、緻密な模様が特徴。東こぎんは比較的布目が太く、大胆な模様が目を引きます。三縞こぎんは三本の縞模様が前後に施されています。

——なぜ、このような技法が生まれたのでしょうか？

久保さん 当時の津軽藩は農民に対して木綿の使用を制限していました。麻は保温性が低く、冬の厳しい寒さを乗り切る衣服としては難があります。そこで麻布に木綿糸を刺しつづることで保温性を高め、同時に補強する方法として生まれたのがその成り立ちです。
津軽こぎん刺しの特徴である「幾何学模様」がなぜ生まれたかについては定かではありません。ただ、津軽こぎん刺しには奇数目で糸を拾うという厳密なルールがあり、そのルールに忠実であることがその美しさを生み出していることは確かです。

「心変わりしたのかな...?」 細部から作り手の人間味が感じられるものも

——津軽こぎん刺しの魅力とは？

久保さん デザインの美しさやそれを生み出す技術の素晴らしさはもちろんのことですが、作品をよく見ていくと、規則性からちょっとはみ出した部分が見られます。例えば「テコナ」というちょうちょうの模様でも、上の部分の糸を減らしたり、下の部分を長くしたりとアレンジを加えた

ものや、繰り返し同じ模様を指す中で気分が変わったのか、別の模様に変えたような跡が見て取れます。そこに作り手の個性や人間味が見えるところも魅力の一つですね。津軽こぎん刺しを制作していた女性たちの「とにかく、立派なこぎんを刺すということは、一番の願いでした。」「ただ、刺すだけでなく、よい柄を刺すことに励みました。」(横島直道『津軽こぎん』)といった証言からは厳しい生活の中で、刺すことが自身の喜びだった様子がかがえます。サントリー美術館が過去に行った展示では、60～70代の女性の方々から特に反響がありましたが、それはきっと手を動かすことで心が整理され、自分が救われた経験を共有できるからではないでしょうか。



「東こぎん 身頃(全図・部分図) 一枚 江戸～明治時代 19世紀」「止まらず」というモドコを一面に刺した作例。よくよく見ると一部だけ、「馬の鬃」というモドコが刺されていることがわかります。「別の模様を刺してみたくなったのかな? と想像を巡らすことも楽しいです」と久保さん。

久保さん また、修繕を繰り返しながら、大切に使用されてきたという点、その作り手の精神性も忘れてはなりません。

袖や裾が擦り切れたら切り取って新しいものに付け替える。汚れた部分は藍色に染め直し、破れた部分には重ね刺しをして補強する。このように、津軽の人たちはさまざまな工夫を重ねながら、津軽こぎん刺しを大切に使い続けてきたのです。



「二重刺し東こぎん 身頃(全図・部分図) 一枚 江戸～明治時代 19世紀」こぎん刺しを施した身頃の上に、さらに刺し子を施した「二重刺しこぎん」。擦り切れたりして弱くなった部分を補強するための工夫が見て取れます。本来の模様が何であったかわからないほど緻密に刺し子が施されています。

久保さん 青森地方の言い伝えに「小豆三粒包める布は捨ててはならない」というものがあります。布はとても貴重なものであり、ちいさな布切れであっても決して無駄にしてはならないということを表した言葉です。津軽こぎん刺しはそうした時代背景の中で生まれてきた技法であり、当館の収蔵品にも、大切に使い続けられた痕跡が残されています。2025年7月2日に開幕する当館の展覧会で津軽こぎん刺しのコレクションをまとめてご紹介する予定です。ぜひ、実物をご覧になっていただきたいですね。

古きものを愛で、補修を繰り返しながらものを長く大切にする文化は、日本のものづくりにおいて今も広く見出される考え方です。遠く離れた海外でも、こうした文化が受容され、伝わっていくことで、未来の循環型社会のあり方を形作っていく。日本の農村から生まれた伝統的な手仕事が、いま、新しい価値をまとうとしています。



もりかわまさひこ
森川真彦

イギリス・ロンドンを拠点に洋服の縫製や型紙製作を行うアトリエ「Studio Masachuka」を経営。UNIQLO EUとともに刺し子によるリペアサービス RE.UNIQLO STUDIOを展開するほか、同社スタッフの修繕技術指導やアップサイクル品の作製などを行う。



くぼさちえ
久保佐知恵

サントリー美術館主任学芸員。早稲田大学大学院文学研究科美術史学専攻博士後期課程単位取得退学。これまでに「没後190年 木米」展、「ざわつく日本美術」展などを担当。専門は日本近世絵画史。

写真提供：Studio Masachuka / ファーストリテイリング / サントリー美術館
※津軽こぎん刺し作品の所蔵先および写真提供は全てサントリー美術館